

平成 21 年 4 月 1 日現在

研究種目：基盤研究 (B)
研究期間：2005～2008
課題番号：17402030
研究課題名 (和文) 経済危機と国際移民-アルゼンチン日系人のデカセギ戦略に関する研究
研究課題名 (英文) Economic crisis and international migration: The case of Argentina migration to Japan
研究代表者 樋口 直人 (Higuchi Naoto) 徳島大学・総合科学部・准教授 研究者番号 00314831

## 研究成果の概要：

研究期間全体を通じて、予備調査 28 件、本調査 337 件の聞き取りを行った。研究期間終了ぎりぎりまでデータ収集をしたため、データの計量的な解析は今後の課題となるが、それに先立ち質的なデータをもとにいくつかの試論的な論考を刊行し、アルゼンチンからのデカセギの特質をめぐる 21 の仮説群を提示した。さらに、現時点で重要と思われる論点と暫定的な知見は以下のようにまとめられる。(1)これまでさほど重視されてこなかったが、日系世代による滞日経験の差は大きい。これは、日本語能力のような文化的要因のみによるのではなく、世代によりアルゼンチンでの職業が異なることにもよっている。全体に、二世や三世よりも一世のほうが、デカセギがもたらす便益は大きい。(2)事実上、家族内の誰でもデカセギできる条件が存在するため、家族内でとりうるデカセギ形態には多くのバリエーションがある。これを、デカセギのもたらすリスクとベネフィットの観点、および経路依存的に家族戦略が規定されるという観点から分析する必要がある。(3)アルゼンチン人の集住地域として、神奈川県の高見と湘南台、愛知県の碧南がある。人口規模が大きいブラジル人に比して、アルゼンチン人のコミュニティは小規模であり、アルゼンチンからのデカセギの全体像を描くような記述が可能である。高見、湘南台、碧南といった地区は、アルゼンチン人コミュニティの形成と変容に関していわば細密画を描く拠点となる。(4)日本での職業移動のあり方を決定するのは、学歴やアルゼンチンでの職歴よりも、日本語能力によるところが大きい。その意味で、2008 年秋の米国金融危機以降に生じた日系人の大量解雇に必要な対策として、短期間の雇用機会創出よりもむしろ、日本語の読み書きも含めて日本語力を高め、職業移動を可能にすることであることが示唆される。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	2,400,000		2,400,000
2006年度	3,500,000		3,500,000
2007年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
総計	10,400,000	1,350,000	11,750,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：在日外国人、労働力移動、外国人労働者、トランスナショナリズム

## 1. 研究開始当初の背景

移民がトランスナショナルな現象であるという認識は、すでにかなり定着している。けれども、そうした現実に相応した理論と方法論を持つ研究はほとんど存在しない。特に在日外国人に関する研究は、日本への適応という一国主義的な研究しかないといってもよい。けれども移住過程は、移動—居住—帰国の3つの局面がトランスナショナルな空間で展開するサイクルである。すべての局面に関わるデータを体系的に収集し、それをつなぐ問題設定によって初めて、現象全体を明らかにできる。

本研究は、そうした前提のもとでアルゼンチンから日本へのデカセギに着目した。移民の規模が大きすぎて全体像をつかみにくいブラジルからのデカセギに比して、アルゼンチンの日系人人口は3万5千人、滞日人口は約5000人と適当な規模であり、聞き取り調査から全体像を描くのに最適と考えられたからである。

## 2. 研究の目的

アルゼンチンから日本への移住過程を、以下の5つの問いに即して実証的に明らかにすることが当初の目的である。全体を貫く問題関心は、次のようなものである。アルゼンチン経済危機や日本の景気後退のようなマクロな変動は、移住システムのようなメゾ要因を媒介して個人の意思決定にどのような影響を及ぼし、いかなる移住過程を生み出すのか。

(1)マクロ変数と移住過程：日亜両国のマクロな変動は、デカセギの意思決定や滞日見通しにどのような影響を及ぼすのか。

(2)世帯戦略：デカセギの意思決定は、世帯戦略として集合的に行われるのか、個人の任意に基づくのか。世帯内でどのような戦略として位置づけられているのか。

(3)社会関係の再編成：家族・友人ネットワークを利用したデカセギ者と斡旋組織を利用したデカセギ者では、日本で形成する社会的ネットワークはどのように異なるのか。すなわち、移住システムの相違は移民コミュニティに形成のどのような影響を及ぼすのか。

(4)日本での定住要因：日本での居住見通しを決める要因は何か。家族合流や移民コミュニティの発展といったメゾレベルの要因か、両国の経済状況のようなマクロな要因か。両者がどのように作用して、デカセギ者の見通しを形成するのか。

(5)帰国後の「成功の方程式」：帰国後に成功しやすいのは、属性や職業でどのような特徴を持つ人か。どのような投資が成功しやすいのか。日本での経験は帰国後どのような影響を及ぼすのか。逆に、どのような人が帰国後の再適応に失敗し、デカセギのリピーターになりやすいのか。

## 3. 研究の方法

日本とアルゼンチンでインタビュー調査を実施した。調査の目的は、デカセギ経験者（滞日中の者も含む）の履歴や経験に関して統一フォーマットでのインタビューデータを蓄積することであり、これに含まれない予備調査を28件行った。本調査に当たる聞き取りは、320件に達している。

こうしたデータ収集に加えて、比較対象を明示化して新たな発見を行うために、これまで調査してきたムスリムやブラジル人移民の調査データを再解釈してまとめる作業も行った。その過程で、必要な理論的レビューも行っている。

## 4. 研究成果

まず、前述のような人数に対する詳細な聞き取り調査を行ったのは、日本の移民研究では本研究が初めてである。それまで、質問紙調査では本研究より多くの人のデータを集めていたが、それではデカセギの背景、日本での職歴やネットワーク、家族合流や離日の過程についてきわめて限定的な知見しか得られない。研究期間ぎりぎりまで調査を続けていたので、まだ本格的な分析を行っているわけではないが、従来明らかにされていなかった移住過程の詳細を解明しうるデータを収集したことが、本研究の最大の成果である。

こうした調査にもとづき、以下のような21の仮説が得られた。収集したデータを詳細に分析し、こうした仮説を検証することが、残された課題となる。

仮説1：円に対するペソの価値は、アルゼンチンから日本へのデカセギのフローとストックをめぐる最大の規定因である。

仮説2：80年代後半のデカセギブームは、バンドワゴン効果によって短期の「切実でない」デカセギを多く生み出した。

仮説3：一世の男性のうち一定割合は、日本の冬にアルゼンチンに数ヶ月戻る季節労働型のデカセギをしており、そうした労働市場に組み込まれていた。

仮説 4: 若年層にとってのデカセギは、大卒者を除くアルゼンチンで高給が期待できない者にとって、学業中途・修了後さしあたり魅力的な就職先となった。

仮説 5: 拡大家族の複数成員がデカセギに行くことは珍しくないが、デカセギの意思決定はもっぱら核家族単位で行われている。

仮説 6: デカセギは、老後が目前に迫る一世にとっては、滞日中に国民年金に加入することで、社会保障の複数化戦略を可能にした。

仮説 7: デカセギは家父長的な支配のなかで家族が集的に決定する場合と、家父長的な支配を脱する目的で個人が決定する場合がある。

仮説 8: デカセギは南米日系移民のトランスナショナリズムの実践としての意味を持ち、そのあり方は沖縄出身者と内地出身者で異なる。

仮説 9: デカセギ者の社会関係は、アルゼンチンから持ち込まれたものであれ、日本で新たに構築したものであれ、デカセギ者の内部で閉鎖的に形成されがちである。

仮説 10: アルゼンチンからのデカセギ者は少ないため、ブラジル・ペルー人と交友関係を持つようになり、出身国を超えた汎日系南米人と呼びうる関係を構築する。

仮説 11: 日本での社会的上昇をもたらすのは、出身国での経験や学歴、あるいは日本での社会関係資本より日本語能力によるところが大きい。

仮説 12: 日本での賃金は、性別による差が決定的で年齢による差は小さい。その結果、女性の単身デカセギは相当無理しないと貯蓄できず、消費欲が強い若年層も貯蓄が難しい。

仮説 13: 家族単位でデカセギに出た場合、女性は育児のため補助的な労働力となる一方、日本人社会との窓口ともなるため、滞日経験がジェンダー化される。

仮説 14: ペソの価値は時期によって大きく異なるため、日本での貯蓄をペソで使用した時期により、デカセギの効果は大きく変化する。

仮説 15: 単身デカセギの場合、留守家族が送金以外の収入源を確保していたか否かでデカセギの効果は規定される。

仮説 16: 一世にとってのデカセギは、不動産やビジネスといった生涯をかけた投資を完成させるプロジェクトとして機能した。

仮説 17: 二世三世にとってのデカセギは、人生を始める基盤づくりを目的とするものであったが、当初の目標は十分達成されず、デカセギ効果は不発に終わった。

仮説 18: 日系人は中間層であるがゆえに老後も子どもに頼らない傾向があり、成人親子は独立した生計を営む結果、デカセギが拡大家族の生活費で消える事態は生じにくい。

仮説 19: デカセギによる貯蓄の用途はアルゼンチンでの生業によって異なり、クリーニン

グ店は不動産投資に使用する傾向が強く、被雇用者と農家は生産投資に使用する傾向が強い。

仮説 20: アルゼンチンの日系社会は、デカセギによってしか生活が維持できないわけではないがゆえに、デカセギは構造化されなかった。

仮説 21: 外国からの送金が生活維持のために不可欠でない限りは、滞在の長期化や定住を決定する要素は賃金水準だけではない。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 26 件)

- (1) HIGUCHI Naoto, 2007, “La migración brasileña a Japón,” *Migración Internacional y Desarrollo en América Latina y el Caribe*, Consejo Nacional de Población, pp.125-155、査読有.
- (2) HIGUCHI Naoto, 2007, “Remittances, Investments and Social Mobility among Bangladeshi and Iranian Returnees from Japan,” *Proceedings for the 8<sup>th</sup> APMRN Conference on Migration, Development and Poverty Reduction*, Fujian Normal University, pp.145-157、査読有.
- (3) HIGUCHI Naoto, 2008, “Do Transnational Migrants Transplant Social Networks? Analyzing the Social Capital of Brazilian Entrepreneurs in Japan,” *Changing Identities and Networks in the Globalizing World: Negotiation, Conflict Prevention and Conflict Resolution in Everyday Life*, Proceedings for the 2<sup>nd</sup> International Symposium of the Afrasian Center for Peace and Development Studies, Ryukoku University, pp.105-121、査読無.
- (4) 樋口直人, 2006, 「分野別動向紹介 (移民・エスニシティ・ナショナリズム) ——国際社会学の第2ラウンドにむけて」『社会学評論』56巻3号, pp.634-649、査読有.
- (5) 樋口直人, 2006, 「多民族社会の境界設定とエスニック・ビジネス」庄司博史・金美善編『多民族のあらかた——特別展「多みんぞくニホン」をめぐって』国立民族学博物館調査報告書 SER, pp.33-43、査読有.
- (6) 稲葉奈々子・樋口直人, 2006, 「イラン人来日の背景と経緯——出稼ぎイラン人の軌跡・渡日編」『コミュニケーション学科論集』19号, pp.157-192、査読無.
- (7) 樋口直人・稲葉奈々子, 2008, 「滞日イラン人・帰国の経緯とその後——出稼ぎイラン人の軌跡・離日編」『茨城大学地域総合研

- 究所年報』41号、pp.67-79、査読無。
- (8)樋口直人・稲葉奈々子, 2009, 「滞日イラン人の求職と転職——出稼ぎイラン人の軌跡・滞日編」『徳島大学社会科学研究所』22号、pp.15-31、査読無
- (9)樋口直人・稲葉奈々子, 2009, 「アルゼンチンからのデカセギ研究・序説——デカセギの概要と仮説提示の試み」『茨城大学地域総合研究所年報』42号、pp.23-39、査読無
- (10)樋口直人・稲葉奈々子, 2008, 「デカセギと家族(1)——日本就労の意図せざる結果・A家の場合」『徳島大学社会科学研究所』21号、pp.131-139、査読無。
- (11)稲葉奈々子・樋口直人, 2008, 「デカセギと家族(2)——農園維持の世帯戦略・B家の場合」『茨城大学社会科学科論集』44号、pp.129-135、査読無
- (12)樋口直人・稲葉奈々子, 2008, 「デカセギと家族(3)——完全な定住と事実上の定住の間・C家の場合」『茨城大学地域総合研究所年報』41号、pp.117-123、査読無。
- (13)樋口直人・稲葉奈々子, 2009, 「デカセギと家族(4)——日本で育った子どもが帰ってから・D一家の場合」『徳島大学社会科学研究所』22号、pp.33-45、査読無。
- (14)樋口直人・稲葉奈々子, 2009, 「デカセギと家族(5)——一家離散と再結合の過程・E一家の場合」『茨城大学地域総合研究所年報』42号、pp.61-67、査読無。
- (15)樋口直人, 2005, 「アルゼンチンの日系クリーニング店とデカセギ」『Migrant's ネット』83号、pp.15-16、査読無。
- (16)樋口直人, 2006, 「リトンさんの出稼ぎ経験とセータービジネス」『Migrant's ネット』89号、pp.14-15、査読無。
- (17)樋口直人, 2007, 「まずはマイノリティ重視の政策転換を」白井美友紀編『日本国籍を取りますか?——国家・国籍・民族と在日コリアン』新幹社、pp.193-206、査読無。
- (18)樋口直人, 2007, 「新宿駅西口の移住労働者」『Migrant's ネット』105号、pp.18-19、査読無。
- (19)樋口直人, 2008, 「『国境を越えた恋愛』のその後——帰国後のイラン人を訪ねて」『国際人権ひろば』78号、pp.18-19、査読無。
- (20)樋口直人, 2008, 「ブラジル移民・これまでの100年とこれからの100年——狭間の悲劇から越境の可能性へ」『Migrant's ネット』107号、pp.3-5、査読無。
- (21)樋口直人, 2008, 「『共生』が隠蔽する格差問題と一国主義思考——移住者の現状から」『NGOと社会』3号、p.3、査読無。
- (22)樋口直人, 2008, 「賽は投げられた?——自民党議連の提言は何を告げるのか」

- 『Migrant's ネット』113号、pp.10-12、査読無。
- (23)樋口直人, 2008, 「ミクシィでつながる南米日系の若者たち——狭間におかれた若者たちの可能性」『Migrant's ネット』115号、pp.21-22、査読無。
- (24)樋口直人, 2009, 「日系人の大量失業——『もうひとつの派遣切り』の教訓」『DEAR News』138号、pp.2-4、査読無
- (25)HIGUCHI Naoto, 2006, “Japan,” *Asian Migrant Yearbook 2004*, Hong Kong: Asian Migrant Center, pp.184-190、査読無。
- (26)HIGUCHI Naoto, 2008, “Japan,” *Asian Migrant Yearbook 2005*, Hong Kong: Asian Migrant Center, pp.167-174、査読無。

[学会発表] (計 10 件)

- (1)HIGUCHI Naoto, 2005, “Brazilian Migration to Japan: Trends, Modalities and Impact,” Expert Group Meeting on International Migration and Development in Latin America and the Caribbean, Population Division, United Nations (Consejo Nacional de Población of Mexico)
- (2)樋口直人, 2006, 「フランス都市暴動の社会学——(3)セキュリティと移民」関東社会学会、慶應義塾大学
- (3)HIGUCHI Naoto, 2007, “Do Transnational Migrants Transplant Social Networks? Analyzing the Social Capital of Brazilian Entrepreneurs in Japan,” 2<sup>nd</sup> International Symposium of the Afrasian Center for Peace and Development Studies, “Changing Identities and Networks in the Globalizing World: Negotiation, Conflict Prevention and Conflict Resolution in Everyday Life,” (Monash University).
- (4)HIGUCHI Naoto and INABA Nanako, 2007, “Savings, Businesses and Social Mobility of Bangladeshi and Iranian Returnees from Japan,” 8<sup>th</sup> Conference of Asian and Pacific Migration Research Network “Migration, Development and Poverty Reduction,” (Fujian Normal University).
- (5)HIGUCHI Naoto and INABA Nanako, 2008, “Learning to Labor, Trapped to Consumers: Adaptation and Alienation among Muslim Migrant Workers in Japan,” ISA Research Committee on Sociology of Migration Inter Congress Meeting “The Mediterranean: Between Passage, Movement, Settlement and Detention,” (La Baune).
- (6)HIGUCHI Naoto and INABA Nanako, “Learning to Labor, Trapped to Consumers: Adaptation and Alienation among Muslim Migrant Workers in Japan,” First ISA Forum

on Sociology (University of Barcelona, 2008.9)

- (7)樋口直人, 2007, 「エスニシティ研究と都市エスニシティ研究の間——構造論的アプローチからの問い直し」日本都市社会学会、山口大学
- (8)樋口直人, 2008, 『共生』で排除と格差はなくなるか——移住者の現状から」<NGOと社会>公開シンポジウム、大阪経済法科大学
- (9)樋口直人・稲葉奈々子, 2008, 「移動する家族の定錨——アルゼンチンからのデカセギと世帯再生産」関東社会学会、首都大学東京
- (10)樋口直人, 2009, 「南米からのデカセギ・これまでの20年とこれからの20年——脆弱性の解消という視点から」名古屋国際センター・地域の国際化セミナー、名古屋国際センター

[図書] (計1件)

- (1)樋口直人・丹野清人・稲葉奈々子・福田友子・岡井宏文, 2007, 『国境を越える——滞日ムスリム移民の社会学』青弓社、pp.1-278.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

樋口 直人 (Higuchi Naoto)

00314831

徳島大学・総合科学部・准教授

### (2) 研究分担者

稲葉 奈々子 (Inaba Nanako)

40302335

茨城大学・人文学部・准教授

丹野 清人 (Tanno Kiyoto)

90347253

首都大学東京・都市教養学部・准教授